



第13回年会特集 第2弾 ～年会に参加して～

年会に参加された若手・中堅の研究者から年会の感想を寄せていただきました

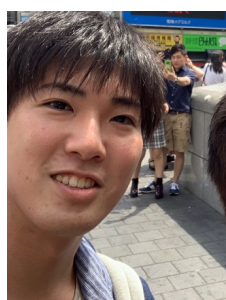
▶ 私のエピジェネティクス研究会の年会への参加は今回が初めてであり、多くの貴重な経験をさせていただきました。今年の第13回日本エピジェネティクス研究会年会は私の指導教官である古関明彦先生が年会長であったため、運営にも携わりましたが、遠方より多くの方が参加されていて驚きました。

今年のテーマは「エピジェネティクス:発生から創薬へ」で、最先端の技術を用いた、発生過程におけるエピゲノムの動態解析や、エピジェネティック因子の構造解析の話が多く、非常に刺激的な内容でした。また、著名な外国人研究者による講演もあり、とても勉強になる研究会でした。ポスター発表もさせて頂いたのですが、近い分野の方が多く、的確な質問やアドバイス等を頂き、大変勉強になりました。

また1日目の懇親会の後に、若手の交流会も行いました。直前に企画することになってしまったので、SNSで急遽、参加してくれる若手を募ったにも関わらず、12名の参加者が集まりました。お互いの研究について白熱した議論が生まれ、瞬間に時間が過ぎてしまいました。せっかく同じ分野の人が集まる機会なので、今後も若手同士の交流を続けていければと思います。

研究会2日目は、外国人スピーカーのRob Klose先生、Wei Xie先生、Fen Lan先生、後藤由季子先生、そして井上梓先生と昼食に行くという機会に偶然恵まれました。著名な先生方との食事でもとても緊張していたため、美味しいはずの天ぷらの味は全く印象に残りませんでした。研究の話もさせて頂き、素晴らしい時間を過ごすことができました。

今回の年会を通じて、多くの方々と交流し、様々なことを学ぶことができ、今後もエピジェネティクスのフィールドで研究していきたいと感じました。今後もエピジェネティクス研究会に積極的に参加して、多くの研究者との交流を続けていきたいと思っています。



梶下 紘貴

理研 生命医科学研究センター  
免疫器官形成研究チーム  
リサーチアソシエイト  
[千葉大学大学院 先端医学薬学専攻博士4年]

▶ 第13回エピジェネティクス研究会年会では、「エピジェネティクス:発生から創薬へ」という基調テーマのとおり、幅広い分野の様々な研究発表と活発な議論が行われました。私にとっては2回目の年会への参加でしたが、エピジェネティクス研究の広がりとその進展の速さを実感する機会となりました。自身の専門である発生生物学だけでなく、疾患生物学や創薬研究の分野など、なかなか触れる機会の少ない研究テーマのお話を聞くことができ、充実したプログラムでした。オーガナイザーの先生方、スタッフの皆様には心より御礼申し上げます。また、口頭発表はすべて英語で行われ、まだ国際学会の経験の少ない私にとっては非常に貴重な機会でした。

印象に残ったのは、石黒先生の減数分裂開始因子に関する発表で、減数分裂開始時のごく短い期間にのみ発現するMEIOSINによって、それまでの体細胞分裂から減数分裂への大きな転換が起こることは非常に興味深いと感じました。ポスター発表は計139題と数も多く、2日間を通して非常に活発な議論が行われていました。私は初期胚の核の構造と機能の關係に着目して研究を行っており、どちらかというエピジェネティクス研究会のメインストリームからは外れたテーマだったにもかかわらず、様々な分野の方がポスター発表を聴きに来てくださり、有意義なディスカッションを行うことができました。また、全体を通して一細胞レベルでの解析が活発に行われていることを改めて実感しました。バルクの解析からはわからなかった、個々の細胞でのヒストン修飾や3Dクロマチン構造の変化の解析は今後さらに進展し、それらがいつ、どこで、どのように起こるかという全貌が詳細に解き明かされていくだろうと予想されます。これからのエピジェネティクス研究の発展がとても楽しみであると同時に、自身もその一助となれるよう努力を続けたいと思いました。



小田春佳

東京工業大学科学技術創成  
研究院 木村研究室  
研究員



▶ 今年、エピジェネティクス研究会の年會に初めて参加させて頂きました。ポスター発表をするわけでもなく、ただ勉強になればと気楽に横浜までやってきました。しかし会場に入るやいなや、良い出会いと共に、本記事執筆の話を頂戴し、分不相応な役目を頂いたことで一気に気負い、緊張して年會に挑むことになりました。私は、エピジェネティクスはもとより研究自体の初学者でありまして、右往左往するばかりでありましたが、素人なりに年會の様子を書き連ねさせて頂きます。さて本題に入る前に白状しなければならないことが一点。

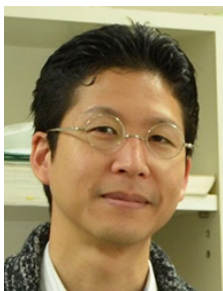
実は、会員ではないのです。

申し訳ないことに。

難しいこととは存じあげますが、皆様が目をつぶりつつ、本記事に目を通して頂ければと思います。

当日、会場に到着しましたのは開会までまだ暫しの時間がある頃でした。人もまばらでありましたが、それでも既にエネルギーな雰囲気が出ておりました。雑多でただただ賑やかだ、というのではなく、洗練された合目的な活気でありました。往々にしてこのような場で飛び交う情報は純度が高く意義深いものが多いので、本年會に対する期待度が増すこととなりました。事実、オーラル、ポスターを問わず、そこで見聞きしたのは刺激的なものばかり。特に、エピジェネティクスとクロマチンの空間的な構造や配置に関して、個人的に興味を抱いておりましたので、Hi-Cなどを用いた研究は垂涎の話題でありました。恨むらくは、私の知識に至らぬところが多い故、せっかくの耳寄り話も十分な理解とならなかったことでもあります(しかも英語に不慣れであったのが頭の痛いところ)。常日頃の不足を憂いつつ、今後の精進を誓う良い機会とも相成りました。

来年こそは十分な力を身につけて年會に挑み、より多くのものを得たいと志を抱きました。また自分の研究をポスター発表し、皆様からの貴重なご意見を賜りたいとも思う次第であります。さて来年の目標を新たに加えたところで筆を置かせて頂きまして、さっそく会員登録をさせて頂きたいと思ひます。



川瀬 雅貴

名古屋大学大学院生命農学研究科動物科学専攻  
ゲノム・エピゲノムダイナミクス研究室  
修士 2年

▶ 本今回、5年ぶりに年會に参加させて頂きました。第13回目の年會のタイトル「エピジェネティクス 発生から創薬」のもと、エピゲノムによって制御されるクロマチンの三次元構造の変遷と発生における機能や、特異的なエピゲノム修飾や認識機構をターゲットとした創薬など、5年前に参加させて頂いていた年會と比較してより幅広く、そしてより高次の生命現象を対象としたエピゲノム研究が展開されており、とても興味深く拝聴させて頂きました。さらに、近年トレンドとなっているPhase separation やクライオ電子顕微鏡法による立体構造なども見ることができ、エピゲノムを対象とした研究分野がますます多様化していると感じました。

ポスターセッションでは2日に渡って発表・議論する機会があり、他の学会と比較して非常に活気に満ちていたのが印象的でした。合計時間セッションでしたが、沢山のとても興味深い内容に夢中になってしまい、あっという間に終わったと感じるほどでした。

また、今回の年會では、私の留学先でのプロジェクトをショートトークとして発表する機会を頂きました。去年から始めたプロジェクトのためプレリミナリーなデータばかりでしたが、先生方から様々なご質問やご意見を頂くことができ、とても勉強になりました。さらに、その後のポスター発表でも沢山の方に来ていただき、自身の今後の研究の展開を考える上でとても有意義な議論ができました。

最後に、近藤先生による本年會の最後の講演を通じて、エピジェネティクス研究が単なるメカニズムの理解にとどまらず、革新的なエピゲノム操作技術の確立、そして創薬への応用へと発展していく時期に差し掛かっていると改めて感じました。自分自身も、今後のエピジェネティクス研究の発展に少しでも貢献できるよう、さらなる研鑽を積みたいと思ひました。



越阪部晃永

グレゴール・メンデル研究所  
博士研究員



**情報を求めています！！**

研究員・ポスドク募集および他の研究会のお知らせなど、ニュースレターを利用して公開してみませんか。年会に関するご意見・ご感想もよろしくお願いたします。お近くの広報委員に気軽にe-mailください。

(代表) 中山潤一 (jnakayam@nibb.ac.jp)  
佐渡敬 (tsado@nara.kindai.ac.jp)  
木下哲 (tkinoshi@yokohama-cu.ac.jp)  
大川恭行 (yohkawa@bioreg.kyushu-u.ac.jp)  
近藤豊 (ykondo@med.nagoya-u.ac.jp)

**日本エピジェネティクス研究会事務局**

佐賀大学医学部 分子生命科学講座  
分子遺伝学・エピジェネティクス分野内  
庶務担当幹事：副島英伸  
担当：八木ひとみ

住所：〒849-8501 佐賀県佐賀市鍋島5-1-1  
TEL: 0952-34-2262  
E-mail: jse-jimukyoku@ml.cc.sags-u.ac.jp